

2021. 12. 5. 主日礼拝説教  
聖書：マルコによる福音書4章13～20節  
『良い地はどこにあるのか』

本日の聖書の箇所は誰もが良く知っている「種蒔き」の物語ですが、1～9節の「種を蒔く人のたとえ」と10～12節の「たとえを用いて話す理由」に続く『種を蒔く人』のたとえの説明」という小標題から始まります。

「たとえ」はイエスの教えの中で大きな位置を占めておりますが、「たとえ」がどんな状況の中で、どんな意図をもって語られたかは実は明白ではありません。たとえば、マルコは1章15節で「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」と述べましたが、この4章では「たとえ」という表現を使って「神の国」(永遠)を描き出そうと致します。このことから分かるのは、マルコにとって「たとえ」とは、別世界のおとぎ話では決してなく、聞かせる者の日常という現実のなりわいそのものであったということが分かってきます。

さて、登場するのは「道ばた」「石だらけ」「いばらの中」「良い地」の4種類です。ここで語られるのは、わたしはなるべく良い地になろうとか、少なくとも道ばた・石地・いばらの中でなくて良かったとかいうまるで「運だめし」のようなことではありません。

そういうことではなく、イエスの言葉を聞く者の「聞き方」が問われているということなのでしょう。

おそらく、最初にあったのは4種類ではなく、道ばた・石地・いばらの中といった3種類だけだったといわれます。後から付け足された「良い地」とはそれらが掘り起こされ、耕され、手間暇掛けて肥料や水が与えられてこそその最終到達点としての「良い地」だったのでしょう。

また15～19節に共通することは「御言葉」という初代教会の宣教用語を聞くことに対する人々の反応でした。その反応とは押しなべて徹底した「つまづき」(14:27)だったのです。このつまづきとは、「～につまづいた」などどうそぶいて自分は何の責任も取らずに被害者を装って逃げ出してしまうという意味ではなく、当時の状況から推察すると社会からの迫害が軸になって語られた用語でした。ですから、つまづきを得るとするのは、わたしたちが道ばた・石

地・いばらの中で経験するつまづきが実はかけがえのない大切な出来事であるということなのです。道ばた・石地・いばらの中があってこそ初めて労苦を積み重ねた上での良い地が得られるということなのです。

つまづきとはそういう意味でわたしたちに「限りある存在」であることをマルコはたとえを通して、イエスの教えの豊かさの一端として伝えます。

わたしたちはどんなものにも限界というものがあるということを知っています。力にも、知恵にも、時にも、金にも、そして、何よりも生命に限界があることを知っているのです。しかし、同時にわたしたちは神の国、つまり永遠を考えるものでもあるのです。

それは、道ばたや石地やいばらの中といわれるもののように一方的に負わされた限界を超えて生きようと願うからではないのです。

そうではなく、それらはまったく逆なのです。限りなく生きようとする愚かな幻想を砕くためなのです。

神の国、言い換えれば永遠とは、限りある自分自身の小ささに気づかせるためのものなのです。それは、限りあるものが限りあるものらしく生き抜こうとする祈りとなるものです。

良い地とは、この人としての限りある節度の中に見出され行くものなのではないでしょうか。